

ガストン・バシユラールにおける「空間」概念について

——『空間の詩学』を中心に——

橋 爪 恵 子

序

本稿はガストン・バシユラールの一九五七年の著作『空間の詩学』を取り上げ、そこで論じられる「空間」概念を論じるものである。第一章 家 第二章 家と宇宙 第三章 引き出し 第四章 巢 第五章 貝殻 第六章 片隅 第七章 ミニアチュール 第八章 内密の無限性 第九章 外部と内部の弁証法 第十章 円の現象学と章立てられたこの著作は、バシユラールが詩を論じた六番目の著作である以上に重要な著作とされている。なぜならイメージを四大元素に基づいて論じてきたバシユラールが、四大元素の後の新たなテーマとして「空間」を取り上げたからであり、これまで依拠していた精神分析理論に代えて、現象学に依拠することを宣言する著作だからである。バシユラールの詩学を二つの時期に分けるならば、間違いなく分水嶺となるこの『空間の詩学』は、バシユラールの詩学のなかで最も有名な著作の一つであり、これまでの研究においても無視することのできないものとされている。しかしこの著作を単独に取り上げて論じた研究はまだ存在しない。本稿で明らかにしたいことは、『空間の詩学』のテーマである「空間」がなぜ選択されたのか、そしてこの「空間」というテーマと現象学という新たに選択された理論がどのように関係しているのか、という点である。これを通じてバシユラールの詩

学、とりわけ現象学に依拠した詩学における『空間の詩学』の重要性とその特徴を明らかにすることが本稿の目標である。

第一節 幸福な空間

バシュラールは現象学に依拠した最初の著作に『空間の詩学』というタイトルをつける。これまで四大元素を元に詩的イメージを論じていたバシュラールが、なぜテーマとして「空間」を選んだのか。それを理解するためには、この著作の主題が単なる空間ではないことを確認する必要がある。著作冒頭では、次のように述べられている。

本書において、我々の考察範囲は明瞭に限定されているという利点をもっている。わたしは実際、大変単純なイメージ、幸福な空間のイメージを考察するつもりである。このような方向の私の調査にはトポフィリの名がふさわしい。想像力によって把握された空間は、幾何学者によって測定や省察される無関心な空間であり続けることはできない。それは生きられる。(PE17)

この著作では主題を「幸福な」空間、「愛された」空間のイメージに限定し、「無関心な」空間、すなわち「幾何学者」の測定する空間と対比する。それではこの「空間」はどのような特徴を持っているのか。ここで注目したいのは、「生きられた」空間という言葉遣いである。これはベルクソンの時間を巡る議論を想起させる。なぜならこの「生きられた (vécu)」という形容詞はベルクソンの哲学としばしば関連付けられており、ベルクソンの時間論を展開した著作としてバシュラールも言及するミンコフスキーの著作には『生きられた時間^{〔1〕}』というタイトルが冠されているからである。そして「空間」は、時間と対となる概念でもある。したがってバシュラールおよびベルクソンの時間論を空間に関わる限りで簡単にみていく必

要があるだろう。

ベルクソンの時間論に関するバシュラールの態度は、一見すると明快である。バシュラールは一九三二年の『瞬間の直観』を始めとする時間論で彼の議論を批判する⁽²⁾。具体的には時間の本質を「持続」とみなすベルクソンに対してバシュラールは、瞬間と時間の本質とみなす。

さて、これからのページでは次のようなプランに従うことにする。持続の理論の本質を思い起こし、できるだけ明確に、対立した二つの項を展開する。——すなわち、一つは「ベルクソン氏の哲学は持続の哲学である」ということであり、——もう一つは「ルブネル氏の哲学は瞬間の哲学である」ということである。「…」最後に我々の議論の後で、次のようなことがわかるだろう。すなわち我々の意見では、最も明確で慎重な立場、時間についての最も直接的な意識に対応する立場とは、やはりルブネル氏の理論である、ということである。(II 16)

バシュラールは、二人の時間論を取り上げ、自らの立場を明らかにする。一人はアンリ・ベルクソンであり、もう一人はフランス史、地域史を専門とした歴史家で、ディジョン大学でバシュラールの同僚でもあったガストン・ルブネル⁽³⁾ (Gaston Roupnel 1871-1946) である。ベルクソンは時間の本質を「持続」とみなし、ルブネルは時間の本質を「瞬間」とみなした。このようにまとめた上で、バシュラール自身はルブネルに同意し、時間の本質を「瞬間」として捉えている。

議論の大枠を踏まえただえで、バシュラールが批判したベルクソンの時間論において空間はどのように位置づけられているかを確認しよう。ベルクソンにおいて空間は、時間を持統として捉えるのではなく、瞬間であると見誤ってしまう人の時間の捉え方とされる。すなわち時間を瞬間として捉える原因は、空間と同様のものと考えたからであり、その結果、時間も任意の場所で区切れるもの、すなわち瞬間として区別可能なものと錯覚される。

ところで空間が等質のものとして定義されるべきであるとすれば、逆にすべての等質的で無規定の環境は空間となるように思われる。「…」時間を空間とは別物ではあるが、それと同じように等質な、無規定の環境とみなす点で人々は一致している。こうして等質性はそれを満たすものが共存かそれとも継起であるかに従って、二重の形式を身に着けるようになる。時間を意識の諸状態がそこに展開されるようにみえる等質の環境である、とする場合には、それによって時間を一挙に自分のものにするのだが、それは時間を持続から引き離すことになる。このような簡単な反省であっても、我々が無意識のうちに空間の中に再び落ち込んでいること教えてくれるはずである。(DE 60)

空間は、等質で無規定の環境である。そして我々は、時間もそのようなものとして考えてしまう。しかしこのようなとらえ方では、時間の本質である持続を無視してしまう。その結果、時間を等質の瞬間の連続とみなす誤った考え方に陥ってしまうのである。

これに対してバシユラールは既に述べたように、ベルクソンを批判し、瞬間こそが時間の本質であると主張する。この時、ベルクソンの議論の継承しつつも、空間に関してバシユラールが別の主張を行う可能性が浮上する。瞬間こそが時間の本質、生きられた時間であるならば、それと関連付けられる空間にも「生きられた」空間が存在しなければならない。その点にバシユラールは着目したのである。

このように『空間の詩学』が「生きられた」「空間」というテーマを掲げたのは、時間をめぐるベルクソンへの批判的態度と解することができる。この点は、『空間の詩学』の章立てからも伺える。第一章から第六章までは「幸福な空間」だが、第七章以降は、必ずしも「幸福」とは結びつかない。第十章 円の現象学は結びとしてしめされた形而上学的考察であるために除外するとしても、第七章 ミニアチュール、第八章 内密の無限性、第九章 外部と内部の弁証法という主題が選ばれている。これらは全て、論理を超越する空間という特徴をもち、それゆえに均質で無機質な空間と対置される。例えばミ

ニアチュールは、大きなものを縮小し、小さな場所に無限を詰め込むものであり、外部と内部の弁証法は、外部と内部を明確に区分可能な幾何学的空間とは異なる空間を可能にする。このような性格付けは、例えばニアチュールに関する次の記述からも明らかとなる。

したがってもし、我々が共感を持ってミアチュールの詩人の後を追いつ、牢獄に監禁された画家の小さな汽車に乗るならば、幾何学的な矛盾は解消し、表象は想像力によって支配される。「…」小さなものの中に大きなものがあることを体験するには、論理を超越しなければならない。(DE 142)

小さいものの中に大きなものがあることを体験するためには、論理の超越が必要とされ、それが可能となるのがミアチュールの世界である。そしてこのかなり特殊な空間であるはずのミアチュールが『空間の詩学』の主題となるのは、主題となる空間が幾何学的な空間と対比的なもの、すなわちベルクソンが批判したような等質的で無機的な空間とは異なるものとして捉えられているからである。

したがって『空間の詩学』は「幸福な空間」を主題としつつも、ベルクソンの議論を批判的に継承する。『空間の詩学』の中でベルクソン本人への言及は一度しかないが、その言及箇所は以下のようなものであった。

周知のようにベルクソンは、引出のメタファーを「既製服」のような他のメタファーと共に、概念による哲学の不足さを指摘するために用いた。概念は知識の分類のための引出なのだ。概念は生きられる知識の個性を取り除く既製服なのだ。それぞれの概念は、カテゴリーの家具の中に、自分の引出をもつ。概念は、定義によれば分類された思考であるので、死んだ思考なのである。「…」しかし現在われわれが取り組んでいる、メタファーとイメージを区別しようとする

る問題としてかんがえてみると、これは固くなり、イメージの自発性までも失ったメタファーの一例である。(PE 80-1)

時間を巡る議論においては、ベルクソンを真つ向から批判したバシュユールだが、イメージの議論においてベルクソンに言及することはそれほど多いわけではない。単なる言及にとどまらず、ある程度の分量でベルクソンに言及するのは、『ローレアモン』でベルクソンの力動性を批判した箇所⁽⁴⁾、および『空と夢』の結語、そしてこの箇所の三箇所のみである。その点からも『空間の詩学』におけるベルクソンの重要性を推察することができる。従来、この記述はそれほど真剣に受け止められてはいなかった⁽⁵⁾。しかしこの箇所は「空間」という問題を考えるうえで見逃すことのできない指摘を含んでいる。まず重要なことはベルクソンの議論において、「引き出し」という空間に対する批判が、概念への批判と結びついていることである。すなわち、概念は「知識の分類のための引き出し」であり、「カテゴリーの家具のなかに引き出し」をもつ存在である。それは分類のみを行い、生きた思考を死んだ思考へ変化させる。だからこそ概念は、哲学にとって不十分である。このような議論において「引き出し」という「空間」は、概念が不十分であることを説明する「メタファー」として使われている。すなわち「空間」的な思考に対する批判的態度は、概念を使用して哲学的問題を考えようとする態度への批判と直結しているのである。

このようにベルクソンの議論を捉えた上でバシュユールは、二つの方向から批判する。第一は、「引き出し」という空間に対する評価である。引出やヤクススや小箱といった収納家具は、我々の内面を隠したり、底知れぬものを見せたり、時間がゆっくりと堆積していくという「生きられた」側面を持っていると彼は指摘する。「生きられた」空間を論じようとする『空間の詩学』は、まさにその問題を著作全体で論じようと試みたとも言えるだろう。例えば『空間の詩学』第三章において引き出しが登場する文学作品が取り上げられるのもそれを裏付けている。

第二の批判は、より重要なものである。それは概念に対し「引き出し」という「メタファー」を使ったことへの批判であ

り、さらにいうならば「メタファー」ではなく「イメージ」として言葉を捉えるべきだ、という指摘である。すでに述べたようにベルクソンの議論において、空間への批判は概念、すなわち言語によって哲学的な問題を考える態度への批判と直結している。それに対して言語を「メタファー」ではなく「イメージ」として捉えることをバシュラールは求めているのである。

「イメージ」とは、バシュラールの詩学で一貫して最も大事な要素として主張されているものである。実際にそれがどのようなものかは述べられていないが、このように「メタファー」と対比されることで、バシュラールがイメージをどのように捉えていたかを推測することができるだろう。すなわち「メタファー」とは、単なる分類に終始する言語であり、何かを別の言語に機械的に置き換える言語を指している。それに対して「イメージ」は、それ以上の可能性を持った言語とされる。したがって「空間」および「空間」的な思考に対するバシュラールの擁護は、単なるベルクソン時間論への反論にとどまらず、自らの詩学の擁護、とりわけ言語の「イメージ」の擁護につながっているのである。

それでは「イメージ」としての言語、すなわち単なる置き換えや分類以上の言語の働きとはどのようなものか。これを論じる際に手がかりとなるのは、否定されている「メタファー」による思考が因果律と関連付けられている点である。ベルクソンは、因果律によって全てを理解できるとする態度を以下のように論じていた。

カントの誤りは、時間を等質の環境として取り違えたことであった。彼は真の持続が、相互に内的な瞬間から構成されており、それが全く等質的な形式をまとうときは、それが空間の中で表されるときであることに気付かなかったように思われる。[∴] それゆえ、自由は理解不能な事象となつてしまふ。(DE 151-2)

カントは時間と空間を同一視する。そのため、本来は質的なものであるはずの心的事象をも空間的にとらえてしまい、様々

な心の動きを区別可能なもの、空間上に並置可能なものとして考える。その結果、カントは自由の問題を論じきれなくなつてしまい、それを「物自体」の領域へと押しやらざるを得なかった、とベルクソンは指摘する。それは併置可能で等質の空間的時間経過が因果律に支配されているからである。原因と結果を直接結ぶからこそ、ある行為には原因があり、結果に自発的な行為の余地が残されない。そしてこのような因果律に縛られた思考の一つが「メタファー」すなわち何かを規則によって決まった何かに置き換える態度である。

この議論は当然、バシユラールも理解していた。そしてベルクソンの考える「空間」とは別の「空間」すなわち「生きられた」空間が詩学において重要である点にも賛同していた。だからこそバシユラールは「メタファー」とは異なる「イメージ」としての言語のあり方に着目したのである。そしてその着眼が現象学への興味へと繋がっている。なぜなら『空間の詩学』でバシユラールは次のようにいうからである。

心理学のようにおぼすと、あるいは精神分析のように力強く因果関係をたどる学説は、詩学の存在論を決定することはできない。詩的イメージを準備するものは、なにもない。(PE8)

心理学および精神分析学は、現象学以前にバシユラールが詩的イメージを論じる際に依拠していた理論である。それらに対して『空間の詩学』ではバシユラールは批判を加える。そしてその批判点は、両者が「因果関係」をたどっている点である。引用で指摘されているように、心理学はおぼすと、精神分析学は力強く、という違いはあれ、彼らはイメージに何らかの「因果関係」すなわち原因を探り、子供の頃の経験やトラウマによって言語を説明しようとする。この関係を見直したからこそ、バシユラールは以前は好意的に引用していた精神分析や心理学の理論を『空間の詩学』以後、否定するようになる。それはこれまでの議論のながれ、すなわち幾何学的でない空間への着目、およびメタファーではないイメージとしての言語

の重視から導き出される結果であった。したがって『空間の詩学』における「生きられた」「空間」という主題の選択は、バシュアールの現象学への依拠と結びついているのである。

第二節 現象学

それではバシュアールがイメージを論じるにあたって依拠した現象学とはどのようなものなのか。前節では因果律の否定が精神分析への批判につながっていることを指摘した。実際バシュアールは、現象学を次のようなものとみなしていた。

現象学だけが―すなわち個の意識の内部でイメージの出發を考察することだけが―われわれにイメージの主観性を回復させてくれる。(PE3)

個の意識の内部で「イメージの出發」を考察すること、これは難しい表現ではあるが、因果律の排除、すなわち原因から因果的に導かれる結果としてのイメージではなく、新しいイメージの生成を「出發」と表現していると理解できるだろう。ここからバシュアールが現象学に何を求めているのかが明らかになる。すなわちそこで目指されている現象学は、超越論的な態度を目指すものではなく、むしろ客体と主体の柔軟な関係性に重点を置いたものとなる。それは、例えばフッサールに対してバシュアールが批判を加える次の文章からも読み取ることができるだろう。

フッサールにとって(『デカルト的省察』翻訳五十四ページ)、与えられた全てのものは主体にとって存在していると予め想定されている。精神の中には所与に対応する受容能力があるのである。だがこの二元論は我々にとって、十分に堅密

で、十分に系統立てられた対応関係とはいえない。他に適切な言葉がないので新しい言葉の使い方をすれば、この受容能力 [cette faculté de recevoir] という言葉を、現代の技術の分野で使われる受信能力 [une faculté de réception] という言葉に置き換えたい。この受信能力は、フッサールが論じる、想定された存在を見直すのに役立つ。この言葉は、十分に定義されず、あまり整合性を持たない物質を「存在しないもの」として排除する。(RA43)

ここでバシユラールは認識における主体と所与の関係に注目し、それが実際の認識と十分な対応関係を持っていない、と批判する。彼の論点は「与えられた全てのものは存在していると予め想定されている」フッサールの議論と、「十分に定義されず、整合性を持たない物質を「存在しないもの」として排除する」自説の対比にある。科学において認識は、認識能力があるだけでは可能とならない。新しい理論が成立して初めて気付き事実のように、我々がそれを定義づけ、積極的に探していくことが重要となる。すなわち主体の側には、所与を積極的に受け取り、これを改変していく態度が求められるのである。

右の引用は科学哲学からのものだが、バシユラールは詩学においても同様の態度をとっていた。その時着目されるのは、「個の意識の内部」における「イメージの出発」、すなわち単にイメージを受け取るだけでなく、そのイメージを積極的に改変していく受け取り側の能力であり、だからこそ「イメージの主観性」が現象学に依拠によって可能になる。

それではより具体的に、バシユラールの詩学は現象学に依拠することによってどのように変わったのだろうか。実はこの問題については、先行研究ではいくつかの異なった指摘がなされているのだが⁶⁾、一つ指摘できることは、バシユラールがこれまで以上に読者の問題へと着目する点である。すでに述べたように現象学への着目は、「メタファー」でない言語、すなわち因果律から離れた言語への着目と軌を一にしており、その時に目指されるのは所与の努力、すなわち受け取る側の積極性だからである。そしてこの点は現象学に依拠した詩学において、読者に対して創造性を認めていこうとするバシユラールの態度によって裏付けられるだろう。

詩的夢想の詩学！これは大きな野望であり、大きすぎる野望かもしれない。なぜならそれは、詩を読むすべての読者に、詩人の意識を与えるということに等しいのだから。(PR 15)

バシュラールは「詩的夢想の詩学」を「大きな野望」と表現する。それは夢想する人間、本を読みイメージを受け取る側の人間であっても詩学（ポイエティク）なものにかかわっている創造的な存在なのではないか、という主張だからである。そのためそれは「どんな読者にも詩人の意識を与えること」と表現される。「大きな野望」といいつつも、『夢想の詩学』という言葉を後の著作のタイトルに選んだように、この問題に彼は正面から取り組んだ。

それではすべての読者に「詩人の意識を与える」ことはどのように可能となるのだろうか。この疑問の鍵となる概念が、『空間の詩学』で論じられる「反響」の概念である。

我々は、感情の共鳴によって、豊かさが我々の内にあるのであれ、詩そのものにあるのであれ、とにかく豊かに芸術作品を受容することができる。ところが詩の現象学的研究は、きわめて遠く、かつ深くまで進むことを願うので、方法上必然的にこの感情の共鳴を飛び越えなければならない。共鳴と反響という現象学的姉妹語を鋭く感じ取れる可能性が、ここに注意しなければならない。(PE 6)

我々は感情を「共鳴」させることによって、豊かに芸術作品を受容することができる。しかし現象学的研究は、この共鳴を越えなければならない。そのときバシュラールが提示する概念が、「現象学的姉妹語」であるところの「反響」である。ではこの「反響」とはどのような概念なのか。より詳しくは次のように説明される。

精神分析学者たちは、一つの語が心の深みにおいて反響を持つことを知っている。彼らは抑圧された思い出を明るみに出すために、この操作上の衝撃を利用してゐる。けれども想像力テストの実施者の野望はさらに大きく、おそらく大きくすぎる（それが大きすぎないとしたら、野望とはなんであらう？）。想像力テストは、単に背後だけではなく、前方においても反響しなければならない。それは火の鳥たちの美しさを——したがってその実在性を——信じる心を想像する力、過剰に想像する力を探査しなければならない。想像的なものだけが、言語に自らを超えるすべを教える。(HPF 64)

ここでバシユラールは精神分析を例にとりながら、反響について説明する。精神分析では、一つの言葉とそれに対する患者の反応から、患者の過去の抑圧された思い出を明るみに出す。したがって詩的イメージは過去の思い出を想起させる力がある、というのが精神学者たちの問題とするイメージの「反響」である。しかし詩的イメージの力はそれだけではない、とバシユラールは指摘する。イメージは過去にだけ「反響」するのではなく、むしろ前方へ、すなわち未来の方向へと働きかける。反響とは、イメージを読者が未来へと運ぶこと、すなわちそのイメージを展開することなのである。(7)。

このように現象学は受け取る側がイメージを未来に、すなわちこれまでなかった方向へと新たに展開していく。それは現象学でバシユラールが目指したメタファーにとどまらないイメージとしての言語を端的に指し示すものであることは、ここで再び精神分析への批判が表れていることから分かるだろう。

それでは読者はイメージをどのようにして「反響」させることが求められているのか。ここで注意しなければならないことは、読者が勝手にイメージを変容させることをバシユラールが推奨しているわけではない、という点である。これについてバシユラールは、次のように言う。

私は実際に、二つの回路の間の電磁誘導のような性質をもった言語誘導が、著者から読者へと起こるはずだと想像する。

そのとき一冊の書物とは、読者のうちに独自の表現への誘惑を覚えさせる心理的誘導機となるだろう。(DR 181)

我々がイメージを作り出す働き、それは電磁誘導のような性質をもった「言語誘導」である。それは言語による誘惑、著者から読者への誘いであり、その誘いに乗って我々は、イメージを未来へと運ぶ。すなわち読者の側の「反響」はある程度、言語そのものによって誘導された結果なのである。それでは言語はどのようにして読者を誘導していくのか。次節ではこの点について、考察する。

第三節 言語の反響

言語はどのようにして、我々を誘導するのか。この点を理解するためには再び、ベルクソンにおいて空間と類比的に語られていた言語の問題を振り返る必要がある。すでに述べたようにベルクソンにおいて言語は、我々の生きた経験を限定し、固定化する試みであり、空間へと位置付けられるものであった。繰り返しになるが、その点をもう一度、確認しよう。

我々は本能的に印象を凝固させ、それを言語によって表現しようとする傾向がある。ここから、絶えず生成の過程にある感情そのものと変化のないその外的対象とを、とりわけ当の対象を表現する言葉とを混同することになるのである。「…」要するに、言葉というはっきりと定まった輪郭を持ち、粗野で、人類の持つ印象のうち安定して、共通で、したがって非人格的なものを蓄えるものによって、個人的な意識のもつデリケートで捉えがたい印象は押しつぶされ、少なくとも覆い隠されてしまう。(DE 86-7)

言語は、印象に輪郭を与えることで安定と共通性を付与すると同時に、それを非人間的なもの、すなわち凝固した「外的対象」にしてしまう。結果としてデリケートな印象は覆い隠され、見えなくなる。この点に関して、バシュアールも気づいていた。「ベルクソン氏によれば、生の中にある力動的な要素は、いかなる言語も翻訳不可能なものである」(VR 110)と彼もまた指摘するからである。

しかし言語には、逆に、それによって可能となる有用性も存在することをベルクソンは認める。

しかし忘れてはいけないことは、バラが我々各人に与える様々な印象から、あなたは、その個人的要素を初めに排除してしまったことである。あなたはその印象の中で客観的な面、すなわちバラのにおいの中の共通の領域、いわば空間に属するものしか保有しなかったのである。そしてこういう条件でだけ、バラとその匂いに人は名前を与えることができるのである。(BE 107)

我々がバラに名前を付けることができるのは、そこに空間に属するものしか保有しなかったときである。ここで注目したいのは、この空間は「共通の領域」すなわち、他者と共有可能な領域だ、ということである。言語の有用性はそこに存する。だからこそ知性は、我々の様々な印象を区別し、分類し、言語という記号の中へ落とし込むのであり、それによってこの概念を他者と共有する。

バシュアールはベルクソンが指摘した、この言語の有用性と不十分さに着目する。言語は我々が他者と共有できる記号でしかなく、細部がぎっしりと詰まっているわけではない。しかしバシュアールは逆に、そのような限定されたものだからこそ、受け取った側に展開の余地があると指摘する。例えばバシュアールは、ブランシヨの家のイメージを引用しながら、次のように言う。

記憶は、このイメージを邪魔してしまっただろう。記憶はイメージを、様々な時代の寄せ集めの思い出で満たしてしまっただろう。ここでは一切がもっと単純、徹底的に単純である。「…」我々は普遍的イメージと呼ぶべきもののおかげで、作家のイメージへと参与する。参与するということによって、イメージは普遍的観念と区別されるのだ。この普遍的イメージを、我々は直ちに特殊なものにする。我々はこのイメージの中に住み、ブランシヨがしたように、イメージに侵入する。言葉も、観念も十分ではない。我々の休息のヒエラルキーをよりよく生きるためには、我々が空間を転倒し、人が記述したいと思うのから遠ざかるように、作家が助力しなければならない。(PE 205)

ブランシヨ描くイメージが彼の「記憶」であるならば、それは混沌とした細部に満ちているはずである。しかしブランシヨが描くイメージはそうではない。それはもっと単純なイメージ、「普遍的イメージ」である。しかしイメージのこの単純さは、決して欠点ではない。なぜなら我々は、その単純なイメージに参与し、それを自分独自の特殊なものにすることができからである。そのとき、言葉や観念といった他者と共有できるものを土台としつつも、さらにそれを超えた空間が生じる。だからこそ、人々は叙述されたものから遠ざからなければならぬのである。そしてこれがバシュラルの考えた「反響」であり、因果関係に縛られた「メタファー」でない言語、「イメージ」としての言語のあり方であった。

そしてこの参与に必要なのは我々自身の過去の記憶や経験である。だからこそ『空間の詩学』は家、とりわけ自分が生まれ育った家の特権的な空間として取り上げる。『空間の詩学』において「幸せな」空間がとりわけ特権化されるのはそのためである。このように読者は新たにイメージを未来へと展開することによって、作者と同じような立場に立ち、そこから喜びが生じるのである。

受身の観想的態度を乗り越えるこの賛嘆において、読者はあたかも作者の幻となったかのように、読書の楽しみは創作

の楽しみへの反映であるように思われる。少なくとも読者は、ベルクソンが創造の徴として、この創造の喜びに参与するのだ。(PE10)

ベルクソンは、生命が何かを作り出すという目標を達成したことを示す指標として、自然は我々に喜びを感じさせる、という。この何かを作り出す行為の一つとして芸術の創作がある⁽⁸⁾。バシュラールはこの議論を取り入れつつ、現象学的な読解によって、言葉をイメージとして扱い、それを反響させることで作者の意識をもつことがあるならば、その時、創造の喜びをも感じることができ、これが読書の喜びの一つとなることを指摘したのである。

結語

本稿ではバシュラールの『空間の詩学』を取り上げ、そこでの主題である「空間」、および現象学への依拠がもつ意味について考察した。言語を論じる際にバシュラールが『空間の詩学』で現象学に依拠するようになったのは、ベルクソンの時間論の批判に基づいた「空間」への着目と密接に関連していたことを確認した。さらに「空間」的思考である因果律への批判が、精神分析でなく、現象学に依拠するという変化へとつながっていることを指摘した。したがって『空間の詩学』でのテーマの選択と現象学という理論の選択は、ともにベルクソンの時間論を批判、継承した結果ということができらるだろう。

さらに現象学で目指される「イメージ」としての言葉のあり方、すなわち「因果律」とは異なる個々の「イメージの出版」を論じようとする態度は、「反響」する言語、すなわち受け取る読者の積極的な参与を推奨するものであった。それはベルクソンが指摘した言語の不十分さ、すなわち言語が「生きた」経験を不十分にしか示すことのできないという議論を受容しつつも、だからこそ読者が自らの経験を元に展開し、ある種の創作となる可能性を含んだものとして捉え返した試みとし

て解釈することがある。

参考文献

Bachelard, Gaston

II ; *L' intuition de l' instant*, Stock, 1992 (1932^{1re}).

『瞬間の直観』掛下栄一郎訳、紀伊國屋書店、一九六九年。

RA ; *Le rationalisme appliqué*, P.U.F., 1986 (1949^{1re}).

『適応合理主義』金森修訳、国文社、一九八九年。

PR ; *La poétique de la rêverie*, P.U.F., 1999 (1960^{1re}).

『夢の詩学』及川馥訳、筑摩書房、二〇〇四年（一九七六年初版）。

PE ; *La poétique de l'espace*, P.U.F., 2001 (1957^{1re}).

『空間の詩学』岩村行雄訳、筑摩書房、二〇〇二年（一九六九年初版）。

FPP ; *Fragments d'une poétique du feu*, Suzanne Bachelard (éd.), P.U.F., 1988.

『火の詩学』本間邦雄訳、せりか書房、一九九〇年。

DR ; *Le droit de rêver*, P.U.F., 2001 (1970^{1re}).

『夢見る権利』洪沢孝輔訳、筑摩書房、一九九九年（一九八七年初版）。

Bergson, Henri

E ; *Divines*, édition du centenaire, P.U.F., 1991 (1959^{1re}). (『意識に直接与えられたものについての試論——時間と自由——』合

田正人、平井靖史訳、筑摩書房、二〇〇二年。ベルグソン全集第四卷『創造的進化』松浪信三郎、高橋允昭訳、白水社、二〇〇一年（一九六六年初版）。ベルグソン全集第五卷『精神のエネルギー』渡辺秀訳、白水社、二〇〇一年（一九六五年初版）。

註

- (1) Eugène Minkowski, *Le temps vécu : études phénoménologiques et psychopathologiques*, J.L.L.D'Arthey, 1933.
- (2) ただしベルクソンの時間論に対するバシュラールの態度は、単なる否定に留まらず、その議論を批判的に継承するものでもあった。この点については拙稿「バシュラール詩学と時間論」（美学会編発行『美学』、五十八巻一号（二二九号）、二〇〇七年六月、一一―一五頁）を参照のこと。
- (3) 主な著作に *La ville et la campagne au XVIIe siècle : études sur les populations du pays Dijonnais*, Ernest Leroux, 1922. や *L'Histoire de la Campagne française*, Grasset, 1932. がある。
- (4) 『ロートレアモン』におけるベルクソン批判については、拙論「バシュラールの思想における時間論 —— 科学とイメーヂを繋ぐもの——」（博士論文、二〇一二年提出）を参照のこと。
- (5) 例えばマリ・カリウはバシュラールのこの記述を「ベルクソンの『引出』の隠喩について、厳しく、しかしかなり軽率に言及するとき…」と批判している (Marie Carrou, *Bergson et Bachelard*, P.U.F., 1995, p33)。カリウによればバシュラールのこの批判が失敗しているのは、二つの「隠喩」の意味を混同しているところにある。バシュラールは「隠喩」という言葉を二通り、すなわち本当に表したいものを表現するときの手段に過ぎない隠喩と、隠れたものを明らかにする本質的な手段としての隠喩、として使っている。そしてベルクソンの「引出」の隠喩は、本来は第一の役割しかも

ないことを認めながらも、第二の意味において批判する、すなわち「引出」という隠喩が本質的なことを表しえていないことを批判する、と指摘するのである。確かにバシュラルルにおいて「隠喩」という言葉は、カリウの指摘した二つの意味を持っている。しかしここでバシュラルルが批判しなかったことは、「隠喩」だけにとどまらないのではないだろうか。第一の意味の「隠喩」によってベルクソンが表したかったもの、すなわち概念のよる思考の不十分さの指摘、という態度そのものを批判する手段として、その「隠喩」であるところの「引出」の別な可能性を指摘した、と考えられるからである。この点でバシュラルルの態度は実はマリ・カリウと同じといえる。なぜならカリウ自身がこの著作で、「ベルクソンが空間の計測は『空間の本質を汲みつくす』と認めるのは誤りである」(Ibid. p.91)と指摘するからである。

(6) 既に述べたようにバシュラルルの詩学を考える場合、『空間の詩学』の以前と以後に大きく二分されることが一般的だが、二つの時期の違いを強調しない研究者も存在する。例えば François Dagognet は、Gaston Bachelard, (P.U.F., 1972 (1965^{1st})) で、現象学に依拠した以降のバシュラルルの思想について、「強調点や語彙の点で明らかに変化があるとしても、基本的な論点は保持されている」と一貫性を指摘している (p.35)。しかし Dagognet においても現象学に依拠して以降の「強調点の違い」は認めており、本論で指摘する読者の問題を重視する側面は、この範囲の変化の一つとみなすことができるだろう。

(7) 実はこの概念はバシュラルル自身が「ユージェヌ・ミンコフスキーによって巧みに規定された現象学的「反響」と同じ意味」(DR 7)と述べているにも関わらず、ミンコフスキーの「反響」概念とは異なった使い方をされている。ミンコフスキーは反響概念に関して、遠ざかる列車を見送るという場面を取り上げながら、それによって我々は「現実の躍動」を感じる、と指摘する (Engène Minkowski, *Ters une cosmologie, fragments philosophiques*, Aubier-Montaigne, 1936, p.76)。これはベルクソンが優美を説明するときの「身体的共鳴」に近い。この「反響」という言葉を使いながら

しかしバシュラールは異なる議論を展開しているのである。またミンコフスキーはベルクソンを好意的に参照しつつ議論を進めているにも関わらず、バシュラールはすでに時間の問題を論じていることから肯定的にミンコフスキーの議論を引用している。この原因に関してドゥ・ラクローは、バシュラールが時間論で引用したピエール・ジャネ、アレクサンドル・マルクなどの人格主義者 (personalistes) の文脈では、ミンコフスキーがベルクソンを批判するものとして受容されていたことを指摘している。(Frédéric Fritreau De Lacroix, 'Le bergsonisme, point aveugle de la clinique bachelardienne du continuisme d'Émile Meyerson', in Frédéric Worms, Jean-Jacques Wunenburger (éd.), *Bachelard & Bergson continuité et discontinuité*, P.U.F., 2008, pp.109-122)

- (8) たとえばベルクソンは次のように言う。「さて、私たちがこの指示を解して、この新しい事実の系列をたどると、喜びがあるところにはどこにも、創造があることが知られます。創造が豊かであればあるほど、喜びは深いのです。(中略) 自分の考えを実現した芸術家の喜び、発明や発見をした学者の喜びのような特別な喜びを考えてみよう」。(E 82) ただし、ベルクソンは芸術を創造することに喜びが伴うことは認めるが、彼にとって最も創造的な人間とは「彼の濃密な行動で他人の行動も濃密にする」人間、「形而上学的な真理を啓示する」人間 (E 84) である。